

北陸地方ニ於ケル聾啞兒ノ研究

第7 發語能力ニ就テ

金澤醫科大學耳鼻咽喉科教室(主任松田教授)

豊田文一

(昭和11年3月25日受附)

目次

第1章 緒言	第3節 發語能力ト教育期間トノ關係
第2章 現今聾啞教育ノ概要	第4節 發語ニ於ケル難音ノ觀察
第3章 被檢人員及ビ検査方法	第5章 總括並ビニ考按
第4章 検査成績	第6章 結論
第1節 發語能力ト殘聽トノ關係	引用文獻
第2節 發語能力ト失官原因別トノ關係	

(本文ノ大要ハ昭和8年10月第回北陸醫學會ニ於テ發表セリ)。

第1章 緒言

現今ニ於ケル聾啞教育ノ目的ハ正常者ノ教育目的ト等シク、聾啞者ノ天與ノ能力ヲ發達セシメ、社會ノ一員トシ、國民ノ一人トシテノ生活ニ適スル様指導スルヲ以テ一般的目的トシ、他方喪失セル能力ヲ回復セシメ、若シ回復セシメ能ハザルハ心身ノ他ノ部ノ能力ニヨリ代償セシムルヲ以テ特殊目的トナセリ。而シテ本邦各聾啞學校ニ於ケル特殊兒童指導方針ハ喪失セル發語能力ノ回復ヲ根本トシ、所謂口話法ノ普及發達ヲ理想トセリ。口話教育ノ根據トシテ最モ重大ナル意義ヲ有スルモノハ殘聽ニシテ、且ツ殘聽ヲ有スルモノニ視法ノミヲ以テ教育セントスルハ口話教育ノ向上ヲ阻害シ、假令聽覺ハ實用ニ供スル迄ニ回復スル能ハズトスルモ言語及ビ智能ノ發達ハ視法ノミニヨルモノノ及ブ所ニ非ズ。

殘聽者ヲ視法ノミニヨリテ教授シ、其ノ成績ノ佳良ヲ誇ルハ歎滿ノ甚シキモノナリト樋口氏ノ極言セル如ク、聽能遺殘者ノ發語能力ノ發達ノ顯著ナルハ聾啞教育者ノ夙ニ認ムル所ナルモ、未ダ兩者ノ關係ニ就キ詳細ニ敘述セルモノアルヲ聞カズ。

曩ニ著者ハ本教室石黒、前田兩學士ト共ニ石川縣立聾啞學校兒童ニ就キ聽能ノ檢索ヲナシ、同校全兒童ノ67.9%ニ於テ殘聽保持者アルヲ發見シ、既ニ本研究第4トシテ發表セリ。果シテ特殊教育者ノ云ヘルガ如ク殘聽ノ存否ハ發語能力ノ良否ニ影響スル所大ナリヤ否ヤハ醫學上ノ興味尠カラザルノミナラズ、現今ノ聾啞教育ニ對スル一般社會ノ關心ヲ喚起スルコトアラント思惟シ、併セテ發語能力ト失官原因別、教育期間トノ關係、難音ノ統計的觀

察ヲ行ヒ、2, 3 知見ヲ得タルヲ以テ、茲ニ敘述セントス。

第2章 現今聾啞教育ノ概要

現今ノ聾啞教育ハ西歐ニ於テ其ノ端ヲ發スルモ、16世紀末葉ニ至ル迄ハ、殆ンド顧ミラレザリキ。Arioteles ノ如キモ聾者ハ言語ヲ有セザルガ故ニ之ヲ教育スルコト能ハズト斷言シ、Galenus モ聽覺ト言語中樞トハ密接不可離ナル關係ニアル故聾者ニ言語ヲ與フルハ不可能ナリト醫學的ニ解説セリ。又 St. Augustin モ亦人ハ言語ヲ介シテノミ神ノ救済ニ與リ得ルモノナルガ、聾者ハ言葉ヲ有セザルガ故ニ神ノ恵ヲ知ル能ハズトシ、當時ノ宗教上聾者ニ獨立セル人格ヲ認メズシテ一般社會ト全ク隔絶シ居レリ。此ノ如ク16世紀末葉自然科学殊ニ醫學ノ勃興アリ、聾啞ニ對スル病理解剖學的檢索ニヨリ、始メテ聾啞者ノ教育可能モ考慮サルニ至レリ。

現今聾啞教育ノ進展ニ最初ノ光明ヲ點ジタルハ16世紀末葉、西班牙人 Pedro Ponce de Leon ニシテ、彼ハ其ノ友 Vallerius 及ビ門下 Juan Pablo Bonnet ノ助力ニヨリ先ヅ實物ヲ示シツ、文字ノ習得ニ努メ、然レ後口唇或ハ舌ノ構音部位ヲ教授シツ、各音ノ發聲ヲ得セシメタリ。之現今ノ所謂獨逸法ノ根源トモ稱スベキモノニシテ、手話法ヲ以テ指導方針トナセル佛蘭西學派ハ Ponce ノ指文字 (Handalphabet) ヲ以テ言語ヲ教授シ、現今ノ佛蘭西法ノ濫觴ナリト稱セリ。扱テ西班牙ニ於テハ19世紀初頭ニ至ル迄 Ponce, Bonnet ノ教授法ニ準據シ、聾啞教育ノ可能ナルヲ唱へ、良好ナル結果ヲ得タリト云フ。其ノ間17世紀末葉 J.C. Amman ハ口唇、舌、口蓋ニテ構音部位ヲ教フルト共ニ發聲ニ際シ指頭ヲ以テ喉頭ニ觸レ、觸覺ニヨリ各音ノ發聲ノ喉頭振顫ノ差異ヲ會得シ、言語ヲ教授セリト云フハ蓋シ特筆スベキコトナリ。他方英國ニ於テモ西班牙ニ於ケル聾啞教育ノ勃興ト無關係ニ17世紀初頭ニ John Wallis 出デ指文字ニテ言語ヲ教へ、更ニ發音ノ會得ニ及ベリト云フモ、當時世人ノ關心ヲ喚起シ能ハザリシト云フ。其後ノ世紀ヲ經テ18世紀ニ入ルヤ William Holder, George Sibocota, George Dalgarno 出デ現在ノ英國聾啞教育ノ基礎ヲ築クニ至レリ。

此ノ如ク聾啞教育ハ西班牙及ビ英國ニテ其ノ搖籃時代ヲ經過シタリシモ、18世紀初頭ニ於ケル佛蘭西聾啞教育家 J.R. Pereira ニヨリ西班牙ノ該特殊教育方法ヲ輸入シ、國內ヘノ普及發達ヲ計ラントセシモ Abbé de l'Epeé ノ猛烈ナル論駁ニ遭ヘリ。de l'Epeé ハ現今ノ佛蘭西法即チ手話法ノ鼻祖ニシテ、彼ハ手眞似、身振ハ言葉、殊ニ聾啞者ノ眞ノ母國語ナリトイフ信念ノ下ニ聾啞教育ハ指文字ノミニヨルベシ。而シテ最モ自然的ナル手眞似ノ考案ニ努力シ、指文字ハ文字ノ習得ニノミ使用スベキモノトシ、聾啞教育ノ基礎トシテ之ヲ行ヒ、然レ後複雑ナル文章或ハ概念ノ表現ニハ手話法ヲ用フルハ最モ合理的ナリト主張シ、聽覺ヲ有セザル聾啞ニ強ヒテ口話ヲ教育スルハ聾啞者ノ智能發達ノ上ニモ不合理ナリト云ヘリ。現今尙手話法トシテ聾啞教育ノ一指導方針トシテ大成セラレ、彼ノ主張ヲ享受スルモノ尠カラズ。

獨逸ニ於ケル聾啞教育ノ發端ハ西班牙、英國、佛蘭西ニ遙ニ遅レ18世紀ノ後期、口話法ノ完成者タル Samuel Heinicke ノ出ヅル迄ハ殆ンド顧ミラレザリキ。彼ハ聾啞兒教育ニ當リ

Amman 法ニヨリ喉頭顫動ノ觸覺ヲ以テ言語ヲ習得セシメ良好ナル効果ヲ得、更ニ Ponces 法ヲ改良シ、口話ノ大成ヲナサント努力シ、遂ニ今日ノ獨逸法、即チ口話法ノ基礎ヲ築ケリ。茲ニ特記スベキハ Itard ノ業績ニシテ、彼ハ夙ニ聾者ノ聽覺練習ノ影響ニ就キ興味ヲ有シ、1802年 Paris 聾啞學校ニ於テ種々ノ強烈ナル音響ヲ利用シ、聾啞兒童中多數ノ殘聽者アルヲ發見シ、而シテ音響ニヨリ聽器ノ訓練ハ聽覺増進ヲ促スニ好影響ヲ齎ラスモノナラント思惟セリ。更ニ其後 Blanchet モ殘聽兒ト全聾兒トハ分離シテ訓育スベシト説ケリ。Urban-titsch ハ殘聽保有聾啞兒ニ對シ聽覺練習ヲ行フベシト云ヒ、氏ハ聾啞ニ於ケル聽覺低下ハ第一ニハ正常機能ヲ有スル音響感覺器ニ餘リニモ微弱ナル刺激ノ爲カ、或ハ病變ニ陷レル聽覺器官ニ感受セシムル適當ナル音波ヲ與ヘシメザルニヨリテ惹起スルモノト假定シ、聽覺練習ニヨリ聽覺ヲ喚起セシメントシ、聾啞兒童ニ幼年期ニ於テハ鐘、音叉、「ハーモニカ」等ノ強烈ナル音響刺激ヲ與ヘ、練習ニヨリ其ノ種類ヲ判別セシメ得ルニ至リ、同様ニシテ語學、或ハ會話語ノ了解ヲ來ラシメントセリ。Urbanitsch ト同時ニ Bezold ハ Bezold-Edelmann 氏連續音叉ニヨリ聾啞ノ聽覺検査ヲ行ヘリ。蓋シ Urbanitsch ニヨリ「ハーモニカ」ハ A' ヨリ f'' 迄ヲ聽取スルモノ多キヲ以テ、同時ニ聽遺ヲ證明スルニ便ナリト云ヘリ。此ノ器ハ上音ヲ有スルモ基礎音強キ爲ニ實際ハ基礎音ノミヲ聽取スルモノナリト信ゼラレタルモ、Bezold ハ「ハーモニカ」ハ特ニ上音著明ニシテ基礎音ニ打勝ツト、其ノ低音ハ近距離ニアラザレバ聽取スルコト能ハザルノミナラズ、此ノ器ノ音ハ比較的強烈ニシテ他耳ノ官能ヲ除外スルコト能ハザル等ノ不利ヲ認メ、Bezold-Edelmann 氏連續音叉ハ聾啞聽能検査ニ最適ナルモノト述ベタリ。而シテ氏ハ其ノ検査成績ヲ根據トシ、尠クトモ $\frac{1}{3}$ ノ殘聽保有者アリトシ、聽器ノ補助ニヨリ會話語ヲ習得可能ナリトシ、聾啞教育ニ於ケル聽學級(Hörklasse)ノ設立ヲ提唱セリ。蓋シ卓見ト云フベシ。之ニヨリ獨逸ニ於ケル聾啞教育ノ現今ニ於テ一段ノ光彩ヲハナテルハ Bezold ニ負フ所大ナルモノアラン。

本邦ニ於ケル聾啞教育ハ明治9年山尾庸三氏等ノ盡力ニヨリ明治11年京都市ニ盲啞院トシテ設立セラレシヲ以テ嚆矢トス。其ノ教育方針トスル所ハ技藝及ビ言語教育ニシテ、言語教育ハ手話法ニ賴レリ。以後約50年間小西信八、石川文平氏等ニヨリ讀唇讀法ニヨリ他人ノ談話ヲ理解シ、又思想傳達作用トシテ發語セシメテ談話ヲ行ハシムル所謂獨逸法ヲ試ミラレタルモ、良効果ヲ得ズ、日本語ハ口話法不可能ナリト斷ジ、手話法ヲ唯一無二ノ方法トシテ舊習ヲ踏襲セリ。大正13年ニ至リ川本宇之介氏口話法ノ理論ト其ノ優越ヲ説述セラル、ニ及ビ漸ク手話法踏襲者ノ蒙ラ斃ケリ。而シテ口話法ハ俄ニ全國聾啞學校ニ影響シ、漸次教育方針ノ改革ヲ行フニ至レリ。然レ共本邦ニ口話法採用セラレテ約10年ニ過ギズ。北陸地方ニ於ケル石川縣立聾啞學校モ昭和4年以後ニ屬ス。

擬テ第1章ニ述ベタル如ク口話教育ハ視聽法ニ其ノ根據ヲ有スルモノナリトシ、發語能力發達ノ爲聽覺モ亦重大ナル要素ナリト唱道サレタルモ、兩者ノ關係ニ就キテノ詳細ナル記載ニ接セズ。著者ノ本研究ヲ行ヘル一端モ此處ニ存ス。

第3章 被検人員及び検査方法

被検人員ハ石川県立聾啞學校兒童ニシテ聽能検査ノ完了セシ38名ニ就キ行ヘリ。聽能検査ハ Bezold-Edelmann 氏連續音又ヲ使用セシモノニシテ其ノ方法ハ本研究第4ニ詳述セルヲ以テ省略ス。發語能力試験トシテ兒童ニ50音ヲ讀マシメ、各音ノ明瞭ナルモノ、稍明瞭ナルモノ、不明ナルモノノ三種ニ分別シ、試験ニ際シ、著者並ニ本教室員及ビ看護婦數名ヲ立會ハシメ合議ノ上決定セリ。

(尙本検査ニ際シ終始助力ヲ惜シマレザリシ長反館學士ノ好意ヲ謝ス)。

第4章 検査成績

第1節 發語能力ト殘聽トノ關係

著者ハ兒童中殘聽ヲ有スルモノノ中兩耳合シテ11「オクターブ」以上ノ殘聽ヲ有スルモノ、10「オクターブ」以下ノ殘聽ヲ有スルモノ、殘聽ナキモノノ三種ニ分類シ、50音中重複セザル

第 1 表

聽能 發語 能力	人員	殘聽ナキ モノ	10「オク ターブ」 以下	11「オク ターブ」 以上
不 明		10	20	8
稍明瞭		61.6%	46.4%	14.1%
明 瞭		22.0%	28.4%	31.5%
		16.4%	25.2%	54.4%

44音ノ發語状態ヲ觀察セリ。而シテ兒童38名中11「オクターブ」以上ノ殘聽ヲ有スルモノ8名、10「オクターブ」以下ノ殘聽ヲ有スルモノ20名、殘聽ナキモノ10名ナリ。検査成績ハ第1表ニ示スガ如ク、言語不明ナルモノノ百分率ハ殘聽ナキモノ61.6%、10「オクターブ」以下ノ殘聽保有者46.4%、11「オクターブ」以上

ノモノ14.1%ヲ示シ、稍明瞭ナル語ノ百分率ハ殘聽ナキモノハ22.0%、10「オクターブ」以下ノモノ28.4%、11「オクターブ」以上ノモノハ31.5%ニ認メ、明瞭語ハ殘聽ナキモノ16.4%、10「オクターブ」以下ノ殘聽保有者ニ於テハ25.2%、11「オクターブ」以上ノモノ54.4%ナリキ。即チ不明瞭ナル語ノ百分率ハ殘聽ナキモノノ百分率最モ大ニシテ、10「オクターブ」以下ノ殘聽保有者之ニ次ギ、11「オクターブ」以上ノ殘聽ヲ有スルモノ遙ニ少シ。反之稍明瞭語、明瞭語ノ百分率ハ殘聽ナキモノノ最小ニシテ、次デ10「オクターブ」以下ノ殘聽ヲ有スルモノ、11「オクターブ」以上ノ殘聽ヲ有スルモノノ順位ニアリ、殊ニ後者ノ百分率前二者ニ比シ著シク大ナルハ特筆スベキモノトス。

第2節 發語能力ト失官原因別トノ關係

先天性聾啞21名、後天性聾啞17名ニシテ、先天性聾啞ノ發語不明百分率ハ48.8%、稍明瞭語ハ29.9%、明瞭語ハ21.7%ニシテ、後天性聾啞ノ發語不明率ハ37.7%、稍明瞭語ノソレハ

第 2 表

原因別 發語 能力	人員	先天性	後天性
不 明		21名	17名
稍明瞭		48.8%	37.7%
明 瞭		29.9%	17.7%
		21.7%	45.2%

17.7%、明瞭語百分率ハ45.2%ヲ示セリ。即チ先天性聾啞ノ發語不明及ビ稍明瞭ノ百分率ハ後天性聾啞ニ比シ大ニシテ、其ノ明瞭率ハ遙ニ僅少ナルヲ認メタリ(第2表)。

第3節 發語能力ト教育期間トノ關係

學年別ニ觀察シ2年生4名、3年生8名、4年生5名、5年生11名、6年生10名ニ就キテ検索セリ。

第 3 表

發語能力		不明	稍明瞭	明瞭
學年	人員			
2	4	68.2%	17.0%	14.8%
3	8	60.8%	17.9%	21.3%
4	5	49.1%	35.5%	15.4%
5	11	33.1%	20.2%	46.7%
6	10	29.8%	31.4%	38.8%

第3表ニ示スガ如ク不明語百分率ハ2年生68.2%、3年生60.8%、4年生49.1%、5年生33.1%、6年生29.8%ニシテ、稍明瞭語百分率ハ2年生17.0%、3年生21.3%、4年生35.5%、5年生20.2%、6年生31.4%、明瞭語百分率ハ2年生14.8%、3年生21.3%、4年生15.4%、5年生46.7%、6年生38.8%ヲ示セリ。即チ不明語百分率ハ2年最モ高ク、3、4、5、6年ノ順序ニシテ、稍明瞭語百分率ハ4年最高ヲ示シ、次デ6年、5年、3年ニシテ、2年最少ナリ。明瞭語百分率ハ5年最大ニシテ、6、3、4、2年ノ順序ニアリ。之ヲ總覽スルニ一般ニ學年ノ進ムニ從ヒ明瞭語、稍明瞭語多ク、不明語百分率ハ學年ノ上昇ト共ニ低下セリ。

第4節 發語ニ於ケル難音ノ觀察

第 4 表

發語能力	不明	稍明瞭	明瞭
各音			
ア行	27.7%	32.8%	39.5%
カ行	36.4%	26.7%	36.9%
サ行	55.8%	22.1%	22.1%
タ行	35.4%	25.1%	39.5%
ナ行	55.9%	14.9%	29.2%
ハ行	46.2%	28.2%	26.2%
マ行	42.6%	21.0%	36.4%
ヤ行	34.1%	21.5%	35.4%
ラ行	43.1%	21.5%	35.4%
ワ行	21.0%	21.0%	58.0%

不明語百分率ハ「ナ」行最モ高率ヲ示シ55.9%、次デ「サ」行(55.8%)、「ハ」行(46.2%)、「ヤ」行並ニ「ラ」行(43.1%)、「マ」行(42.6%)、「カ」行(36.4%)、「タ」行(35.4%)、母音(27.7%)、ワ(21.0%)ニシテ、稍明瞭語百分率ハ母音(32.8%)、「ハ」行(28.2%)、「カ」行(26.7%)、「タ」行(25.1%)、「サ」行(22.1%)、「ヤ」行並ニ「ラ」行(21.5%)、「マ」行並ニ「ワ」(21.0%)ノ順序ニアリ、而シテ明瞭語ハ「ワ」(58.0%)、母音並ニ「タ」行(39.5%)、「カ」行(36.9%)、「マ」行(36.4%)、「ヤ」行並ニ「ラ」行(35.4%)、「ナ」行(29.2%)、「ハ」行(26.2%)、「サ」行(22.1%)ノ順ニアリ(第4表)。

第5章 總括並ニ考按

幼兒ノ言語發達ハ周圍ノ言語模倣ヲ以テ最大要素トナシ、其ノ聽覺ノ重要ナルヤハ言フ俟タズ。小兒期ニ於ケル言語習得ノ4期、即チ叫喚期、謔語期、模倣期、言語形成期中、謔語期及ビ模倣期ニ於テ小兒ハ言語ヲ其ノ聽覺ニヨリ補正シ、或ハ補足シ行クモノニシテ、此ノ如キ時期ニ於テ一度聽覺ヲ消失スルヤ、言語ノ習得素ヨリ望ム能ハザルノミナラズ、既ニ習得セル言語モ遂ニ忘却ノ止ムナキニ至ルベシ。且又先天性聾啞ニ於テハ生來聽覺ヲ有セザル爲叫喚期ヲ經過スト雖モ謔語期ニ入ル能ハズ、言語ノ習熟亦望ムベカラズ。而シテ聾啞トナリ得ル時期ニ就テハ一般ニ7、8歳迄ナリト云フモ、時ニ遙ニ高年齢ノコトアリ。著者ハ14歳

ノ男子ノ脛骨髓炎聾ニシテ、聽覺消失後2ケ年ニシテ嘔トナレル症例ヲ經驗セリ。

扱テ聾啞教育ノ進展近來著シキモノアリ。本邦ニ於テモ既ニ60年ノ星霜ヲ經タルモ、大正13年川本氏ニヨリ口話法ノ採用ヲ提唱セラレシ迄ハ特記スベキモノナカリキ。第1章ニ敘述セル如ク現今ノ聾啞教育ノ指導方針トスル所ハ口話法ニシテ、喪失セル能力、即チ發語能力ヲ回復セシメントシ、多大ノ研鑽ヲ積ミツ、アリ。而シテ口話教育ハ視覺ノミヲ以テ教育スルハ其ノ向上ヲ阻害スルモノトナシ、殘聽ヲ利用セントスル傾向ハ特殊教育者ニヨリ認メラルル所ナリ。

發語能力ト殘聽トノ關係ニ就テ著者ハ Bezold-Edelmann 氏連續音又ニヨル正確ナル検査成績ヲ基礎トシ日本語ノ44音ニ就キ觀察セルニ前章ニ詳述セル如ク、殘聽ヲ有セザルモノノ發語ハ不明瞭ナルモノ極メテ多ク、殘聽ヲ有スルモノノ中ニテモ聽域ノ大ナルモノ程、明瞭語ノ多キヲ認メタリ。之即チ口話教育ニ聽力ノ極メテ重要性ヲ帶ブルモノナルヲ示スモノニシテ、殘聽素ヨリ實用ニ供スル能ハズト雖モ、教授者ノ音響、音調、音色等ハ假令微少ナリトモ、聾啞兒ノ聽覺ヲ刺戟シ、其ノ發語ニ幾分ノ補正ヲナシ、構音部位ノ認知、即チ視覺ニヨル發語教育ニ極メテ有益ナル要素トナルベシ。

次デ發語能力ト失官原因別トノ關係ニ就テハ後天性聾啞ニ於テハ先天性聾啞ニ比シ、發語明瞭ナルモノ遙ニ多シ。後天性聾啞中聽力消失前ニ既ニ言語ヲ習得セルモノアリ。而シテ諸種疾患ニヨリ聽覺ノ喪失ヲ來シ、習得セル言語モ忘却ノ止ムナキニ至リタルモ、數年後再ビ言語習得ノ機會ヲ得、僅少ナリトモ其ノ記憶ヲ蘇ヘラセ、未ダ言語ヲ發シ得ザリシ先天性聾啞ニ比シ、視覺及ビ聽覺ヲ判ジ容易ニ發語能力ヲ増進シ得ルモノナルベシ。

發語不明ナルハ學年ノ進ムニ從ヒテ漸次減少シ、反之明瞭ナルハ學年ノ昇ルニ從ヒテ、百分率ノ増加ヲ認メタリ。即チ口話教育ノ訓練モ正常兒童ニ於ケル諸種教育ト等シク學年ト共ニ進歩スルコトハ明瞭ニシテ、聾啞教育者ノ絶エザル努力ノ一端モ察知シ得ベシ。

幼兒ニ於ケル言語習得ニ於テモ音ニヨリ難易ノ存在スルハ周知ノ事實ナリ。44音中聾啞兒ノ發語中ニモ自ラ難易ノ認メラル、ハ首肯シ得ルトコロニシテ、難音ヲ發見シ難音ニ對スル教育上ノ缺陷ヲ檢索スルハ現今ニ於ケル聾啞教育上重大ナルモノト云ハザルベカラズ。其ノ最モ困難ナルハ「ヤ」行、次デ「サ」行、「ハ」行、「ナ」行ニシテ最モ容易ナルハ「ワ」、次デ母音、「タ」行、「カ」行、「マ」行、「ラ」行ナリキ。今之等ヲ語音構成部位ニ就テ觀察スレバ「ヤ」行(開放性口蓋韻)、「サ」行(摩擦性齒唇韻)、「ハ」行(爆發性喉頭韻)、「ナ」行(開放性齒唇韻)、「ラ」行(摩擦性齒唇韻)、「マ」行(開放性口唇韻)、「カ」行(摩擦性口蓋韻)、「タ」行(爆發性齒唇韻)、母音、「ワ」行(開放性口唇韻)ニシテ、難音トサル、モノハ口蓋韻、喉頭韻ニ多ク、發語容易ナルモノハ爆發性音、口唇韻ニ多シ。即チ其ノ構音部位ノ口蓋、或ハ喉頭ニ存スルモノハ教授ニ際シ、聾啞兒ヲシテソノ容易ニ了解シ得ラル、口唇韻ニ比シ、困難ナルモノナラン。

以上敘述セル所ヲ以テ口話教育ニ於ケル殘聽ノ重要性ノ大ナル事ハ明カニシテ、聾啞ニ對スル機能検査殊ニ聽能検査モ亦缺ク可カラザルモノナルコトヲ認識シ得ベシ。只聾啞ノ言語

ハ抑揚ナク、所謂「Monoton」ニシテ、聞ク者ヲシテ了解ニ苦シマシメ、或ハ不快ノ感ヲ懷カシムルコト尠カラズ。本邦ニ於テ口話教育採用セラレ日未ダ淺ク、此ノ如キ點ニ就キ各聾啞學校ニ於テ絶エザル努力ヲ拂ハレツ、アリ。所謂「リズム」教育之ニシテ近キ將來ニ於テ、之ガ成果ノ完カランコトヲ期待スルト共ニ、著者モ亦他日ヲ期シテ言及スル所アラントス。

第5章 結 論

著者ハ本編ニ於テ聾啞兒ノ發語能力ニ就テノ觀察ヲナシ、殊ニ其ノ殘聽トノ關係ニ及ビ、口話教育遂行ノ一指針タリ得ルモノト信ジ茲ニ敘述セルモノナリ。

之ヲ結論スレバ次ノ如シ。

(1) 發語能力ト殘聽トノ關係

無殘聽兒ト兩耳合シテ11「オクターフ」以上ノモノト、10「オクターフ」以下ノモノトニ三分類シテ觀察、發語能力ハ50音中重複セザル44語ニ就キ、發語明瞭ナルモノ、稍明瞭ナルモノ及ビ不明ナルモノノ三種ニ分別セリ。其ノ成績ハ發語不明百分率ハ殘聽ナキモノニ於テハ61.6%、10「オクターフ」以下ノ殘聽兒ハ46.2%、11「オクターフ」以上ノ殘聽保有者ハ14.1%ニシテ、明瞭語ノ百分率ハ殘聽ナキモノハ16.4%、10「オクターフ」以下ノ殘聽者ハ25.2%、11「オクターフ」以上ノモノハ54.4%ノ高率ヲ示セリ。

(2) 失官原因別ト發語能力トノ關係

先天性聾啞中發語不明百分率ハ48.8%、後天性聾啞ハ37.7%、反之明瞭度ニ於テハ先天性聾啞21.3%、後天性聾啞45.2%ナリキ。

(3) 學年ト發語能力トノ關係

發語不明百分率ハ學年ノ進ムニ從ヒテ低下シ、發語明瞭百分率ハ之ニ相反ス。

(4) 發語ノ難易ニ關スル觀察

最も困難ナルハ「ヤ」行、次デ「サ」行、「ハ」行、「ナ」行ニシテ、最も容易ナルハ「ワ」、次デ母音、「タ」行、「カ」行、「マ」行、「ラ」行ノ順位ニアリ。

擱筆スルニ當リ、御指導御校閲ヲ賜リタル松田教授ニ深甚ナル謝意ヲ表ス。

引 用 文 獻

- 1) **Bezold** : Über Fehlquellen bei Untersuchungen des Taubstummgehörs Zeitschr. f. Ohrenheilkunde. Bd. 39, 1904. 2) **貝田**, 聾啞ノ聲言及言語. 3) **川本**, 本邦ニ於ケル聾啞教育ノ沿革ト將來ノ理想, 大日本耳鼻咽喉科全書, 3卷ノ2. 4) 同人, 聾啞教育史概要, 大日本耳鼻咽喉科全書, 3卷ノ2. 5) **樋口**, 聾啞教育一般. 6) **Maas** : Die Sprache des Kindes und ihre Störung. 7) **Politzer** : Geschichte der Ohrenheilkunde. Bd. 1. 8) **Schumann** : Handbuch des Taubstummenwesens. 9) **豊田, 石黒, 前田**, 北陸地方ニ於ケル聾啞兒ノ研究, 第4, 十全會雜誌, 40卷, 11號. 10) **内田**, 支那人ニ於ケル聾啞ノ研究, 大日本耳鼻咽喉科會報, 34卷, 3, 4號. 11) **Urbantschisch** : Über den Einfluss Methodischer Hörprüfung auf den Hörsinn Wien. med. Presse. 1894. 12) **Urbantschisch** : Über Hördefekt bei Taubstumm. Zeitschr. f. Ohrenheilkunde. Bd. 33, 1898. 13) **Wanner** : Therapie der Taubstummuntersicht vom Ohr aus Deuker u. Kahlers Handbuch d. H. N. O. heilkunde. VIII.